

コナン・ドイル『失われた世界』のメモ

takaidos

『失われた世界』のメモなど

コナン・ドイル。
1912年発行。

龍口直太郎・訳。
1970年発行。

傑作。
探求、探検ものはやっぱり面白い。
テンポ良く冒険譚を味わえる。

動物学会の講演者と聴講人、チャレンジャー教授の観衆の中での大声を張り上げてのやりとりがまず面白い。
人の描写も本当にその人がいるかのように、目の前に見るかのように特徴を描き出す。
アマゾン探検ではさまざま植物や鳥、動物も出て来て景色の描写も秀逸。
本当にアマゾン奥地に分け入っているかのような描写。
登場人物たちの会話の流れも面白く、読み込み甲斐がある。
ユーモア、機知に富んでいる。

★★★★★

<目次>

1. どこにでも英雄的行為はある
2. チャレンジャー教授に会って運をためせ
3. あ的那个人はまったく我慢のならない人です
4. これこそ最大事件
5. 質問!
6. 神の鞭
7. 明日は未知の国へと消える
8. 新世界の前哨隊
9. だれがそんなことを予想できただろうか?
10. いともふしぎな事柄の続発
11. このときだけはわたしも英雄
12. 森の中の恐怖
13. 忘れえぬ光景
14. あれは真の征服だった
15. この目で偉大な驚異を見た
16. 行進! 行進!

訳者あとがき

<登場人物>

ジョージ・エドワード・チャレンジャー教授: 有名な動物学者、アマゾン探検隊長。気難しすぎて一切妥協せず周りは敵ばかり。凶暴だが奥さんには弱い。風貌は大柄で猿人に似ている。ワイスマン学説、進化論。1863年生まれ。47歳? ★
サマリー教授: 比較解剖学、チャレンジャー教授のライバルだが、アマゾン探検に行くと恐竜の存在を確かめる。細身、痩せている。66歳。★
ジョン・ロクストン卿: 世界的な探検家、46歳。以前南米に来たとき奴隷を酷使する監督(混血スペイン系)ペドロ・ロペスに宣戦布告して殺害した。軍隊経験者でフェンシング、ボクシング、射撃が得意。★
エドワード・マローン: 『デイリー・ギャゼット』紙の記者、アイルランド人、23歳。★

グラディス: マローンの恋人、金持ちハンガトン氏の娘。
ハンガトン: フリーメイソン。
マッカードル: 『ギャゼット』紙の社会部長、編集長。マローンの上司。

ジョージ・ボーモン卿:『ギャゼット』紙の主筆。

タープ・ヘンリー:『ネイチャー』誌の記者、マローンの友人。細菌学。

パーシバル・ウォールドロン:博物学者、動物学会ホールで講演。チャレンジャーは「山師」と評す。

ウォドリー:動物学研究所所長。チャレンジャーの報告を信じない。

ジェームズ・イリングワース博士:動物学会。チャレンジャーとサマリー共通の敵。

・探検隊の従者たち

サンボ:アマゾン探検隊の従者。大柄の黒人。非常に忠実。パラ。★

ゴメス:アマゾン探検隊の従者。混血。英語を話せる。パラ。★

マヌエル:アマゾン探検隊の従者。混血。パラ。★

モーホー:アマゾン探検隊の従者。モーホー族インディアン。ボリビア。★

ホセ:アマゾン探検隊の従者。モーホー族インディアン。ボリビア。負傷して離脱。★

フェルナンド:アマゾン探検隊の従者。インディアン。ボリビア。★

アタカ:アマゾン探検隊の従者。インディアン。支流。チャレンジャーの前回探検に参加。

カヌー。★

イペトゥー:アマゾン探検隊の従者。インディアン。支流。チャレンジャーの前回探検に参加。

カヌー。★

メイプル・ホワイト:失われた世界の発見者、アメリカ人。画家、詩人。

<あらすじ>

1910年。

マローンは上司マッカードル編集長にチャレンジャー教授にインタビューをするように言われて話を聞きに行く。

チャレンジャー教授がアマゾン流域の踏査中に発見した故メイプル・ホワイトのスケッチブックの絵と自身の写した不鮮明な写真をもって、恐竜が存在すると動物学会に発表すると非難を浴びていた。

「恐竜はるか古代に滅びた」と動物学会で話すウォールドロンにチャレンジャーは「恐竜は今でもいる！」と反論する。

サマリー教授も恐竜の存在を否定するがチャレンジャーは調査委員会を立ち上げて、委員会のメンバーで確かめに行くことを提案する。

マローンはチャレンジャー教授が発表してもいいと承諾した内容を承認した後に発表すると約束して取材、同行を許される。

かくして恐竜の存在を確認するために、サマリー教授、新聞記者マローン、探検家ロクストン卿の探検隊一行はアマゾン・マナウスに行く。チャレンジャー教授も合流して、4人の一行は8人の従者を集めて、現地人が近寄らないメイプル・ホワイト台地に向かった。

アマゾン川河口パラ(現在ベレン)からマナウスまで船旅。

(日付は記述をもとに加算して行ったので確実ではない。)

7月15日、アマゾン川流域マナウスでチャレンジャー教授が合流。

7月29日、大型蒸気ランチ”エスメラルダ”号でマナウスを出発。

8月02日、エスメラルダ号をマナウスに返す。外界との繋がりが無くなる。

8月06日、支流でアタカとイペトゥーのカヌー2隻に乗り換える。

8月08日まで大きな河を遡る。黒い流れと白い流れ。

8月09日、インディアンの見張りの太鼓の音。

8月18日、インディアンの威嚇の言葉。1km以上続く早瀬。

8月19日、陸標のアサイヤシを通過して緑色の川に出る。

8月21日、カヌー乗り捨て。

8月22日、土地の状況が変わる。生えている植物が熱帯性のものになる。

8月24日まで岩ばかりの上り坂。珍種の植物や灌木、竹藪を通り抜ける。

8月25日、竹藪を背にして開けた平原。灰色の巨大な翼竜を目撃。三角岩(玄武岩)のそばにキャンプ設営。従者たちに見張らせて台地上り口を探しに行く。台地は高さ150~300m。

断崖の登り口を探している間にアメリカ人ジェームズ・コルバーの白骨死体を発見。33km歩く。

夜、翼長6メートルの翼竜が降りて来て夕食を奪われる。
サマリー、チャレンジャーを疑った事に対するお詫びをして仲直りをする。
ジャララカ蛇の群れに追われる。
8月26日、メイプル・ホワイトの目印を辿るが台地への登り口が岩で封鎖されているのを発見する。6日目。
8月27日、4人は高さ150mほどの三角岩の上に登り18メートルの木(ブナ)を切り倒して橋を作って台地に移動する。ゴメスが裏切って木を落とす。サンボが物資を三角岩に運び上げてロープで送ってくれる。
8月28日、メイプル・ホワイト台地でイグアナドンの親子を目撃する。沼地で1000羽ほどの翼竜を見つけ追われて森の中に逃げる。キャンプが何者かに荒らされていた。
8月29日、翼竜から受けた咬み傷がもとで高熱を発する。
8月30日夜、キャンプに恐竜が来てジョン卿が松明で追い払う。
8月31日、イグアナドンが襲われて死んでいるのを発見。恐竜にアスファルトが付着しているのを確認。サマリー「下界を降りる方法を考えるべき」チャレンジャーら「もっと探検すべき」で議論。マローン、木に登って猿人と出会う。
台地の形状(長径45km, 短径30km, 浅いジョウゴ型、中心に湖・周囲15km)が分かる。地図完成。
その晩、地図を褒められて気を良くしたマローンはグラディス湖(中央湖)に行き、いくつかの発見をする。
湖の向こうの洞窟に火が灯っていた。
湖に巨大アルマジロ、巨大な鹿、ステゴサウルス(剣竜)が水を飲みに来ていた。
帰りにヒキガエルのような顔をした肉食恐竜に追いかけてられて罠として作られた穴(直径20m)に落ちて助かる。

9月01日早朝、キャンプが荒らされて3人が居なくなっているのを発見。
外界のサンボに上司マッカードル氏への最後の手紙を書いて渡す。

疲れて寝ているとジョン卿に起こされて、銃、弾薬など持って隠れ家に移動する。
3人は猿人に連れ去られていたが、ジョン卿だけ逃げて来て銃を取りに来たのだった。

台地の中には猿人と背の低い人間がいることがわかった。
猿人たちは人間たちを誘拐して来ては殺していた。
チャレンジャー教授は猿人の長老と似ていて手厚くもてなされるが、ジョン卿とサマリー教授は人間たち捕虜と同様に竹やぶの刑場で飛び降りさせられることが分かり、ジョン卿は脱出してキャンプに銃を取りに来たのだった。
マローンとジョン卿は2人を救出に行くことにする。
そしてサマリーを救い出してキャンプに戻ることが出来た。
4人のインディアン(穴居人)の生き残りも付いて、隠れ家に移動する。
しかしそこへも猿人たちがやって来たので、インディアンの洞窟へ向かった。
湖で三つ目の魚トカゲや蛇頸竜(プレシオサウルス)を発見する。
途中でインディアンの長老率いるインディアンのカヌーの大船団と出逢う。
助けたうちの1人が長老の息子マレタスでいっしょに猿人たちを滅ぼしに行くことにする。

インディアンたちがイグアナドンの子供を調理してくれる。

チャレンジャー、間歇泉を発見し遊離水素を何かに使うことを思いつく。

400~500人のインディアンと猿人と激戦の上、勝利する。
猿人の女、子供は洞窟に連れて帰る。

インディアンにストアと呼ばれる巨大なヒキガエルのような怪物が洞穴にやって来る。
インディアンたちが毒矢で退治する。

インディアンに台地から降りるルートを訊いても教えてくれないので、念のため従者サンボと連絡を取れる元のキャンプに引き上げて台地を降りる方法を検討する。

イクシオサウルス(アザラシと魚が混じったような)、巨大な緑色の水蛇、インディアンたちが怖がる沼地の巨大な白い動物、巨大な鳥フォロラクス、トクソドン(体長3mのテンジクネズミ)などを発見。

ジョン卿がカゴに入って沼地で翼竜・悪魔の子を捕獲する。
チャレンジャー、間歇泉のガスを爬虫類の内臓に入れて風船を作る。

4人を吊り上げるすばらしい浮力で、これで外界に降りれそうだった。

インディアンの息子マレタスが内緒で外界に出るための地図をくれて、台地を脱出することが出来た。

ちょうどサンボが台地と三角岩に脱出用の橋を作ろうとインディアンたちが集まっていて、一行はそのまま台地をあとにした。

パラの町でペレイラ氏に衣服一式をもらって、イベルニア号でサザンプトンの港に帰って来た。

帰国して再び動物学会で報告。

サマリー教授の挨拶、恐竜を確認したという報告とチャレンジャー教授へのお詫び、賞賛。

イリングワース博士による異議。

チャレンジャー、悪魔の子(ガーゴイルのような翼竜)を見せるも、悪魔の子は観衆を騒然とさせて逃げてしまった。

一行は人々に大喝采を浴び讃えられる。

マローンが探検に参加した動機は恐竜発見のスクープ記事を書いて、恋人グラディスが結婚を承諾してくれることがゆめだったが、すでに彼女はすでに法律事務所の書記と結婚していたのだ。

ジョン卿、持ち帰ったダイヤモンドを4人で分配し、チャレンジャーは博物館を建て、サマリーは教職を辞して白亜層の化石の最終分類をするという、ジョン卿はまた台地を訪ねるといい、傷心のマローンもついて行くと言った。

<メモ>

☒☒ 博物学

- ・アメリカ産のワニはアリゲーター、アフリカ・オーストラリアのワニはクロコダイル。
- ・南米には野生のゾウはいない。
- ・鳥の翼は前肢が発達したもの、コウモリの翼は薄い膜が張っている三本の細い指が発達したもの。
- ・南アメリカは花崗岩の大陸。恐竜のいる大地は玄武岩(火成岩の一種)。

☒☒ 名言

チャレンジャー、恐竜の存在を疑われて。

- ・無知や嫉妬から出た疑いを晴らすのは難しい、出来ない。

☒☒ 迷信

クルプリ:悪い事をする森の精。

☒☒ アマゾン川マナウス。

雨季:12~5月。

乾季:6~11月。卓越風:南東。

・8章が台地に続く道のりで景色の自然描写がいい。

・もし恐竜が茂みに潜んでわたしを待ち伏せしているとすれば、わたしの身の上に起こったことを理解していることになり、やつらにも原因と結果とを結びつける知力がありということになるだろう。

漠然とした掠奪本能だけで行動している脳味噌の足りない動物だったら、わたしの姿が視界から消えた途端、、、新しい餌食を求めて立ち去るのではないか。

・バビロンのユダヤ人、エジプトのイスラエル人。

・本作にモデル。

メイプル・ホワイト台地:ロライマ山

チャレンジャー教授:エジンバラ大学医学部の生理学者ウィリアム・ラザフォード

ジョン・ロクストン卿:コンゴやアマゾン社会の状態を調査をして人気を博していた、アイルランドの独立運動家ロジャー・デイビッド・ケースメント。

☒☒ チャレンジャー教授シリーズ

- 『[失われた世界](#)』 (1912年) The Lost World
- 『[毒ガス帯 \(英語版\)](#)』 (1913年) The Poison Belt (チャレンジャーの他の短編2つも含む)
- 『[霧の国 \(英語版\)](#)』 (1926年) The Land of Mist

～『霧の国』について。

”Heavily influenced by Doyle’s growing belief in Spiritualism after the death of his son, brother, and two nephews in World War I,”

☒☒ 近代年表～蒸気と探検・発掘

実際の史実と本シリーズの時期がいっしょに並んでいる年表。

この年表の1910年までが本作『失われた世界』の話。

=====

『Forgotten Futures III』

George E. Challenger’s Mysterious World

A Role Playing Sourcebook For Sir Arthur Conan Doyle’s Scientific Romances

by Marcus L. Rowland

Copyright © 1993-5, revised with extra illustrations 2000

<http://www.forgottenfutures.com/game/ff3/worldbk3.htm#wb21>

=====